〈編集後記〉

# 地方自然誌の専門誌をめざした頃

このたび，編集委員長の任を降ろしていただくことになった。これは関西自然保護機構（機構と略記）で編集委員長，理事，理事長をお勤めになり，長年にわたって機構の発展にご尽力された山岸哲先生（山階鳥類研究所所長）が会誌17巻1号の編集後記で述べられた言葉である（山岸，1995）。このたび，私も漸く同じことを言わせて頂けることになった。この機にと言うわけでもないが，私的な思い出を記すことを，お許し頂きたい。

1994年春のことであったが，現在の機構会誌は自らを会報と称していた。会報編集委員会は，山岸哲先生（大阪市立大学理学部動物社会学教授在任中）を編集委員長とし，著名な諸先生で埋められていた。1994年内のことであったのか，1995年初頭のことであったのか，すっかり忘れてしまったが，私に機構会報編集の世話をするようにという話が急に持ち上がった。主な理由は山岸先生が，日本鳥学会会長に御就任され，超多忙となられたことによるのだったが，長島正子氏が長年支えてこられた機構事務局運営も若干は関係していたと思う。

機構会報編集は，ほとんど人に評価されない仕事であるが，それに耐える覚悟がないと勤まる仕事ではないこと，当時（現在も多分にそうであるが）私が血道をあげていた熱帯のことを，表紙も含めて会報で安易に取りあげてはならないことなど，機構理事会の諸先生からの御忠告と御注文は少なからずあったのだが，不安を抱えながえらも，会報編集の任務をお受けすることにした。考えが甘かったことは間もなくはっきりしたのだったが，「数年すれば，山岸先生は鳥学会の重責から解放され，機構会報の編集委員長に復帰される筈だ。同じ大学の同じ学科に属する若輩の私（大阪市立大学理学部植物生態学助教授在任中）は，教授のために短い繋ぎの役に徹しさえすれば良いのだ。」，と考えたからであった。

最初の仕事は，1995年早春，河野昭一先生（京都大学理学部植物分類学教授在任中）の研究室をご訪問し，カタクリの写真をご拝借したことであった。この写真は機構会報第17巻1号の表紙を飾っている。この号の編集に携わりながら考えたことは，前編集委員長の目ざされた編集方針を継承することであった。前編集委員長の編集方針とは，創刊以来機構会報が堅持した編集方針に加え，地方の自然誌に特化した専門誌の役割を，新たに会報に付加することであったと理解している。自然誌は自然保護の基礎科学に他ならないからだ。以後，地方自然誌の専門誌を目ざして，多くの皆様のご支援により，未熟ながらも今日まで編集の任にあたらせて頂いた。この間の軌跡は機構会報（17巻1号～21巻2号まで）および会誌（22巻1号～25巻2号まで）に明らかである。編集方針に肉迫しつつあったというようなご評価を頂ける巻号が，よしんばあったとしたら，それは偏に会員の皆様方のご努力とお力添えの賜物である。会員なくして会誌なし。

編集は学ぶことの連続であった。頭を悩ませつつも楽しかったことの一つに，和文英訳がある。会報15巻1号から，筆者の所属と報文表題は英語表記を併記するように報文の印刷書式が変更されていたからだ。所属の和文表記に対応する英文表記が原稿にない場合，いくつかの英文表記案を編集方で用意し，寄稿して下さった方々と議論させて頂くこととなった。便宜的英訳とはいえ，この作業には現在の無言のご批判，将来の有言のご批判を覚悟せねばならず，この意味で難しい作業であった。

英語よりはドイツ語に御堪能な，四手井綱英先生の報文原稿も和文表題のみで，英文表題は記されていないことが多かった。このため表題の英訳を試みることになるのだが，何時もテストをされているような気分に陥った。先生の主宰しておられた研究室を離れ，大阪市大に留学（周囲の方々および私自身の意に反して長期留学となってしまった現在を深く反省しています。）した当初，もうこれで先生からの試験問題も無くなったと思っていた。私にとって会誌の編集は，四手井先生の授業での，試験の再開を意味していた。「どうだい，これを訳せるかい！」とおっしゃっているような気がするのである。

先生からの最後の試験問題は，「森林」は「モリやハヤシ」ではない（四手井，2003），であった。直訳の一例として，Forest is not forest and forest の表記を考え得る。この禅問答のような迷訳は，全く理解されないであろう。思案に余ったあげく，A Japanese vocabulary, Shin-Rin, means deep (Shin) forest (Rin) in its etymology，と意訳した。この訳では，元になっている否定文に備わる文そのものの力強さ，意表を突くことによって筆者の言わんとする世界に読者引き込まんとする言葉の罠，および漢字とカタカナから発散する文字の呪術は，跡形もなく失われてしまっている。この試験問題については，先生から及第点を頂けるような名訳を未だ思い付いていない。苦しみを超えて楽しみに昇華した，四手井先生からの私のための英語の試験も，今号で終わりである。これまで編集を支えて下さった，編集委員の先生，非編集委員であるにも関わらず査読を快くお受け下さった先生，御寄稿頂いた機構会員および非会員の先生，長島さん，土倉さん（故人），遊磨さんに，慎んで感謝致します。

会誌編集委員長解任記念の拙文を山岸先生からの引用文で始めた。始めにならって，終わりも先生の文章（山岸，1995）のコピーとしたい。会誌編集の後任は前迫ゆり氏である。彼女の斬新な編集を期待して，老兵は消えてゆきたい。

**引用文献**

四手井綱英．2003．「森林」は「モリやハヤシ」ではない（山科からの手紙7）．関西自然保護機構会誌，25（2）：121－122.

山岸哲．1995．科学と技術（編集後記）．関西自然保護機構会誌，17（1）：81.

（山倉拓夫）